

## 「落語と私」 その参拾四

### 三代目 橘ノ百圓

新型コロナの感染率も上がりつつ在り、少々心配です。又、アメリカの大統領選挙も、バイデン氏が勝利演説をして、アメリカ史上初の女性副大統領の誕生と喜ばしい事ですが、これからの舵取りは非常に難しいと思われまます。

唐突ですが、日本の識字率は断然上位ですが、意外に思ったと言っては失礼ですが、PCで調べた処では、キューバが99.9パーセントの識字率です。

日本が全国的に教育に力を入れ始めたのは、明治維新以後で、明治5年に発布された「学制」によりほぼ輪郭が定まって、現在の義務教育が整ったのは、昭和22年成立の「教育基本法」「学校教育法」により、小学校6年、中学校3年の6、3制が確立した訳です。ご維新前の江戸では、職人さんを中心に無筆の人が多かったのです。

テな訳で？今回は「落語と無筆」 無筆＝字の読めない、書けない人 を主題に書き進めたいと思います。ところが、この無筆の噺が案外少なく落語事典で調べましても「無筆の女房」「三人無筆」「清書無筆」「手紙無筆(無筆の手紙)」「平林」「按七」「泣き塩」の七ツが載ってます。その中で私が実際に聴いた事が在るのは「三人無筆」「手紙無筆」「平林」と「按七」。落語は時代に合わないと消えて行くもので「無筆の女房」も現在は演じ手が居ません。落語事典から引用しますと、

旦那衆から大いに可愛がられる幫間の白露、中なか家に帰れず女房がやきもちを焼いて、離縁を申し出るが、白露は女房に手紙を持たせて仲人の所へ使いにやる。この女房が無筆の為手紙の内容が解らずそのまま仲人に手紙を渡すと、仲人は文脈から、これは女房に意見をしてくれとの意と察し「離縁は良くない、亭主は仕事で家を留守にして居るのだ」と諭し元の鞘に納める事が出来た。女房は無筆は恥かしい事だと思い、近所の子供から“いろは”を習い小遣帳を付けるまでに、旦那のお供で、ひと月ほど家を空けて帰って来た白露は、この小遣帳を見てビックリ、中を読むと“あり十二文”と有るので「何んだ。この“あり”と言うのは!？」と訊くと「お前さん、そのくらいの字が読めないのかえ、ローソクと言う字じゃないか」

この落げが解る方がいらっしゃいますか!?古い川柳に「無筆でも読める煙草屋ローソク屋」昔は、煙草屋は腰障子に煙草の葉に絵が描いて有って煙草屋、ローソク屋はローソクの絵の中に“あり”と書き添えて「ローソクあり」と無筆の人でも直ぐに解かる様に成っていたので、この落げなのですが、仕込としてこの説明をしなくてはならず、又、少々地味な噺です。この辺りも演り手の居ない原因かも!?

次に実際聴いた噺を書きます。本の粗筋を書いても、何んとなく空々しさが出て、本人も自信が持てません。

「三人無筆」これも滅多に寄席では懸りません。私も誰

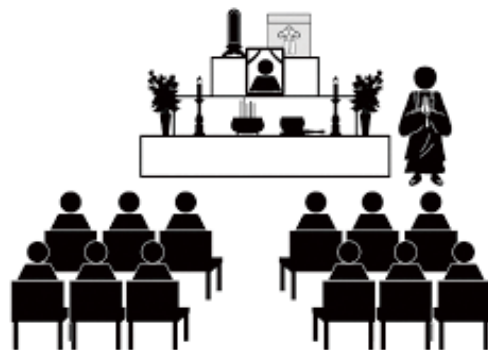


かの独演会で聴いたのでしょうが、記憶が定かでは在りません。

別名「帳場無筆」「無筆の帳付け」「向うづけ」

出入の本店の葬式に会葬者の名前の帳付けを頼まれた熊さんと源兵衛さん。この二人が無筆、熊さんは恥を搔くくらいなら夜逃げをしようと覚悟を決めたが、オカミさんに「明日の朝早くにお寺に出掛け、火を熾して湯も沸し、帳面を綴じてすっかり支度をして、源兵衛さんが来たら、お茶を入れて下にも置かない様に持ち上げて『外の事は何ンでもしますから帳付けだけはお願いします』と頭ア下げれば大丈夫だヨ」と知恵を授かり、翌朝早くにお寺に着くと、既に源兵衛さんが来て居てすっかり支度が出来ている。その上頭を下げられ「実は、私は無筆！満座の中で恥を搔く訳にはいかないので、お引き受けをしましたが、外の事は何ンでもしますから帳付けをお願いします」「エッ！そりゃ<sup>ずる</sup>狡いヨ」ここで二人共無筆テェ事が判明。これから二人で夜逃げ(朝逃げ)する訳にもいかず、商人の源兵衛さんが知恵を搾り「それでは、玄関の前に大きな机を据えて、帳面と硯を向うへ向けて二人で大きな声で「お名前は各々<sup>めいめい</sup>付けでございます」と怒鳴りましょう。中には「そんな馬鹿な事が在るか」と言う者も有るでしょうが、その時は「これはご隠居の遺言<sup>いごん</sup>でございます」と言やア「死人に口無しです」これで熊さんも一安心、大きな声で「帳面は各々付けでございます」と言っている所に、会葬者の中にも無筆の人が、「そんな馬鹿な遺言が在るか!？」と揉めている所に易(手習い)の先生が来て「各々付けとの事ですから、ご自分で書いては」「いえ、それがちょっと都合が悪いもんで」「ああそうですか、貴方は自分の名前が書けないのかイ!?!」「何もそんなに大きな声をしないで」「私が代筆をしても構わンのかな」(中略)ンな訳で易の先生が皆さんの名前を書く事に。中には「先生、私ッしのもちょっと見てください」と手を出す者も、これで帳付けは上手く行き、読経も終り会葬者も帰り始めた頃に一人遅れて来て「俺の名前を書いといてくれ」「イヤ、帳付けは各々付けだ」「ンな事言わずに頼マァ」「これは隠居の遺言なんだ」、ここでこの男も無筆、三人が無筆だテェ事が判り「源兵衛さん何か良い知恵はないかい!?!」「うん。良い工夫が在る」「在りますか」「お前さんが、ここに来なかった事にしよう」

この噺の中では、無筆の人が随分大勢居るものだと思わせます。



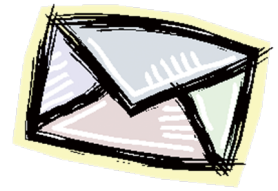
三話めに皆様も良くご存知の「平林<sup>ひらばやし</sup>」の登場です。

別名「名違い」「字違い」

大阪根多の前座噺です。今は小僧の定吉で演っていますが、他の名前で演ずる方も居ます。

無筆の定吉が旦那の使いで、隣町<sup>ひらばやし</sup>の平林さん所へ手紙を届ける事に「お前は、字が読めないのだから忘れぬ様に、口の中でヒラバヤシ、ヒラバヤシと唱えながら行きなさい」と意見をされお店を出る。途中までヒラバヤシと言いながら歩いていると、信号機の所でお巡りさんに「これ！赤は止まれ、青が進めだ」と注意され定吉は「赤止まれの青進め」と何ン度も口の中で言っている内に、案の定手紙の宛名が判らなくなる始末。そこで他人に訊くのが一番だと、通り掛りの人に尋ねると初めの人「タイラバヤシ」と読む。次に訊いたのは「ヒラリン」その後は「イチハチジュウのモクモク」仕舞には「ヒトツとヤッシでトッキキ」

と来たもんだ。この中には定吉を揶揄う者も居れば、本人も良く解らずに知っている限りの読み様で答えた人もいるかも!?定吉は、この全ての文句を大きな声で唱えて歩いていると、通り掛りの人に「お前は気違いか!」と言われ、定吉が「ほんの名違い」で落げたり、定吉の声を聞いた人が「お前は定吉さんじゃないか」と言われ「アッ!ヒラバヤシさん」で落げる人も居ます。



出典：<http://sakamitisanpo.g.dgdg.jp/hirabayasi.html>

テな事で今回は「落語と無筆」でした。

皆様どうぞ新型コロナなどに負けずに良いお年をお迎えください。

